宗像

発行所
宗像大社
宗像会
〒811-3505　福岡県宗像郡玄海町
電話　0940－62－1311㈹
定価　一年送料共　1000円

秋季大祭の幕開け

勇壮にみあれ祭

海上神幸　秋空の下一大ページェント

宗像大社秋季大祭の初頭を彩る海上神幸「みあれ祭」が、十月一日早朝より玄界灘洋上にて勇壮に繰り広げられた。

午前八時三十分、筑前大島で、花火を合図に中津宮出御祭を斎行。先月九日に中津宮本殿に奉安された沖津宮の御神璽と中津宮の御神璽が輦台に奉安され、大島小学校の鼓笛隊を先頭に、先導神職が祓い清める参道を、警蹕が渡御を知らせる中、中津宮より中央波止場へと御神幸、筑前大島は祭りムード一色となった。

大島港の内外には、波切り御幣、紅白の吹き流し、大漁旗などで飾った約五百隻の漁船が待機、いずれもエンジンの音を高鳴らせ停泊、広い港内も大小の漁船で埋め尽くされ、マストが林立する様は誠に壮観。

両宮の御神輿が御座船に奉安されると、一斉にシャッターが切られ、波止場にはお見送りのため村中の人々が参集、港内は「みあれ祭」の始まりを今か今かと待つ熱気であふれた。

一方田島の辺津宮でも、沖・中両宮の御神輿をお迎えする出御祭が斎行され、辺津宮御神輿は神湊へと御神幸された。

午前九時三十分、合図の花火が打ち上げられ、御座船は大島港を出港。先ず先導船の幸福丸（津屋崎）、福寿丸（地ノ島）の二隻、次いで沖津宮御座船の共進丸（鐘崎・宗岡譲氏奉仕）、と中津宮御座船の伸洋丸（大島・宮本昭男氏奉仕）が静かに出港。「国家鎮護宗像大社」一大幟の後には、供奉船が続々と従う。秋晴れの穏やかな天候となり、参加船は例年にも増して多かった。

出港後一旦船団を整えた大船団は、船首を東に向け御神幸。空には各テレビ局新聞社のヘリコプターが海の一大ページェントを上空を旋回しながら取材。洋上を吹き渡る秋風は、潮の息吹に包まれて、まだ秋とはいえ汗ばむ時期には心地よい。各船とも快調な機関音を響かせ幾筋もの航跡を残し進む。地ノ島を間近に見て船団は大きく右に旋回、船首を神湊港に向ける。

神湊では沖・中両宮の御神輿をお迎えする太田宮司以下奉仕神職が正服に威儀を正して御座船の到着を待つ。

神湊港で一年ぶりに宗像三宮の御神輿がお揃いになられ、お祓いの後、御旅所である頓宮へ御神幸、頓宮祭を斎行。御座船奉仕者に感謝状を贈呈して祭典は終了、続いて三台の御座車は辺津宮へ御神幸、正午前無事入御され秋季大祭は幕を開けた。

大祭期間中の天候も、二日に雨が降っただけで一日と三日は晴天に恵まれた。一日が日曜日だったので、午前九時には第一駐車場は早くも満車状態、午後十一時までこの状態が続いた。参拝者は三が日で約十二万人を数え、期間中は終日大いに賑った。

――◇――◇――

平成十二年度秋季大祭奉仕（敬称略）

九月九日

沖津宮御神璽迎え御座船奉仕

第八宮地丸（19t）

船主　宮本一郎（50才）

十月一日

「みあれ祭」（海上神幸）

沖津宮　御座船奉仕

共進丸（14t）鐘崎漁協

船主　宗岡　譲（45才）

花火船奉仕

豊丸（大島漁協）豊福正人

報道船奉仕

みたけ（大島漁協）

陸上神幸御座車奉仕

株式会社　新出光

西久大運輸倉庫株式会社

宗像地区タクシー協会

株式会社　魚屋

十月一日

宗像郡内神職奉幣使

摩利支神社

宮　司　中村　侃

隨　員　高田　志伸

（宮地嶽神社）

宮地嶽神社献幣使

権祢宜　草場　啓司

氏子奉幣使

池　野　篠原　一彦

沖津宮　先導船奉仕

幸福丸（4.9t）津屋崎漁協

船主　花田清美（42才）

中津宮　御座船奉仕

伸洋丸（17t）大島漁協

船主　宮本昭男（68才）

中津宮　先導船奉仕

福寿丸（7.9t）地ノ島漁協

みあれ祭（海上神幸）

中世に行われていた「御長手神事」を昭和三十七年に再興した。「御長手」とは「長妙」の事で、長い紅白の布を竹旗竿に附したものを云い、当大社沖津宮鎮座の沖ノ島に繁茂する竹を神威のよりどころとし、その竹に布を付けたものを宗像の神の象徴として辺津宮に迎え、祭りを営んだものである。

祭儀の名称を「みあれ祭」としたのは、「神のみ生れ」、即ち宗像大神の御神威の一層の発揚を祈求する意味に加え、当大社は沖津宮・中津宮・辺津宮からなる三宮一体の精神を加味したものである。

神具・装束
結婚式場用品
株式会社　井筒
福岡店　福岡市博多区東公園一－三二（〒812－0045）
電話　福岡（092）六五一－九四五六番
本店　京都市下京区油小路六条北入（〒600－8231）
電話　京都（075）三四一－三三四一㈹－四番

木の匠の技
総合建設業　株式会社　弘江組
事務所　〒811－3406　福岡県宗像市大字稲元一〇二五
電話　（〇九四〇）三二－二五六七

御礼

秋季大祭に際しましては、宗像警察署・玄海町消防団を始め、各関係諸庁の御指導を仰ぎ、宗像六漁業協同組合外、全国各地の皆様方には神前へのお供えを賜わりますと共に、氏子・崇敬者各位の御協力により、諸祭典を無事盛大裡に斎行することができました。

ここに紙面を以って、謹んで御礼申し上げますと共に、皆様方の益々の御繁栄を心より祈念申し上げます。

平成十二年十月吉日

宗像大社社務所

各位御一同様

七五三祭の御案内

毎年十一月十五日に数え年三才の男女、五才の男児、七才の女児をつれて神社に参拝し、今日までの無事発育を感謝し、更に将来の成長を祈願するお祭りです。

昔は三才の男女は髪置、五才の男児は袴着、七才の女子は紐解きの祝いが行われていました。

この我国古来の慣習を今日に伝えるのが、七五三祭りです。

当大社でも、お子様の健やかな成長と幸せを御奉告する、恒例の「七五三まつり」を、本年も左記により盛大に執り行いますので、皆様お誘い合わせの上御参拝下さいます様ご案内申し上げます。

記

期間　平成十二年十一月一日～十一月二十六日（尚、この時期以外でも、おまつりは行っております。）

初穂料　一件（一人）三、〇〇〇円
一名増すごとに、二、〇〇〇円の追加となります。

授与品　御祈願お申し込みのお子様には、お守り、千歳飴、御幣等を授与いたします。

余滴

或る新聞コラム「四季」の中におもしろい記事があった。「一枚の古地図」と題する記には、江戸時代に描かれた福岡城下町と今の福岡市内の様子が書かれている。

江戸時代黒田藩の中心となっていた当時の福岡城下町は、「福岡」と「博多」の二つからなっていた。当時の城下町の人口は福岡が「士官屋敷八百三十八軒、下屋敷七十四軒。町下千六百二十九軒。人数七千四百七十人」。

博多は「家三千三百九十五軒。人数一万四千六百十九人」だそうである。

この地図が書かれたのは、文化九年（一八一二）と云うから一八八年前の福岡市の様子である。現在百万都市として九州第一の大都市から見て二百年前には約二万余人の都市であったとは、信じられないことである。

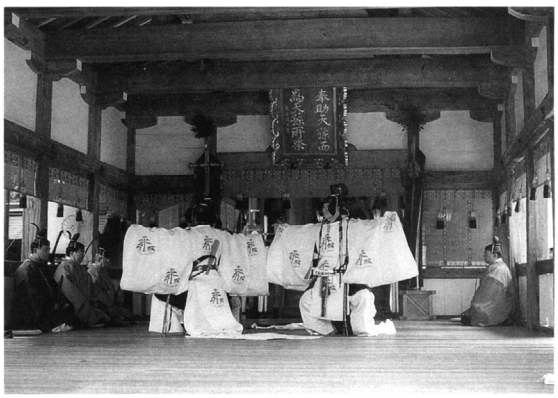
さらに古図によると地型は大きく変わっている。福岡城の外堀は赤坂門から東方に位置する那珂川に向かって延び、赤坂門側を中堀、薬院門から数馬門までの堀を肥前堀と呼び、長さは一・三キロ、幅六十メートルもある水堀であった事がうかがえる。

この堀は明治四十三年から大正にかけて埋め立てられ、周辺の土地を合わせ十二万五千平方メートルと云う今の福岡市の中心地となった。

現在の岩田屋クサイドや元NHK会館などは、もとの堀の中に建っている事になる。コラムでは野沢九大教授の「古地図は歴史の宝庫である」という言葉で締められている。

田島放生会
連日の〝神賑行事〟

別名「田島放生会」とも称されるこの大祭は、「宗像大菩薩縁起」によると、神功皇后新羅遠征の故事にちなみ、今から約七百七十年前の貞永元年（一二三二）、時の大宮司、宗像氏経が始めたと言われ、以来永く神郡宗像の人々に親しまれている。期間中連日、神前に神賑行事が奉納された。



一日
「主基地方風俗舞」

主基地方風俗舞保存会会員により雄々しく奉納された。

天皇陛下御即位の祭儀「大嘗祭」に際し、新穀を奉献する斎田を、京都を中心に西方を「主基地方」、東方を「悠紀地方」に制定され、その地方の風俗歌を基に宮内省雅楽部で作曲、作舞され、大嘗祭大饗宴にのみ披露される国風舞で、「主基地方」「悠紀地方」風俗舞と称され奉納される。

この舞は門外不出が原則とされ、大嘗祭の後は一度も奏される事はなかったが、昭和三年の昭和天皇陛下御即位の大礼に際し、福岡県が主基地方に選ばれ、この時に京都御所紫宸殿に当大社関係者一同御礼詣を行った。翌昭和四年には、主基地方勅定記念会を設立、特別の思し召しを以て宮内省より皇室との縁深い当大社に「主基地方風俗舞」を御下賜いただき、全国で唯一伝承保存され、春秋の大祭の折主基地方風俗舞保存会員により奉納されている。

二日
「流鏑馬神事」

十月十二日早朝「流鏑馬神事」が奉納された。

福間町・宮木貞彦氏外三氏により奉納、神馬が疾駆し、射手が馬上で的に向け矢を放つ度に、見物の人々から歓声と拍手が贈られた。

当大社の流鏑馬の歴史は古く、南北朝時代の正平年間まで遡り、その年の豊作を祈る行事として行われる。

直垂装束で行うこの神事は、遠い昔宗像武士が戦のもと、本年の豊作と、一族の繁栄を祈り、神門前の馬場で征矢を射た姿を再現する。

三日
「浦安舞」

地元玄海中学校女生徒四人により奉納された。

本年も十二単に正装し、手に檜扇と鈴を持ち、美しく舞う姿は参拝者を魅了した。

「翁舞」

今から約五百五十年前の明応八年、時の大宮司宗像氏国が鐘崎の沈鐘を引揚げんと船網をかけた際、天がにわかに掻き曇り、狂瀾怒濤を呼び断念。すると海上たちまちに穏やかになり、その海面に翁面が浮かび上がった。この面を龍神の授け給うと感激し、神前に奉納、神宝とした。

そしてある年、国中に悪疫が大流行した際、この面を以て舞を奉納し、悪疫退散、災難消除、延命招福を祈ったところ、たちどころに静まったと伝えられる。

その後年一回の秋季大祭に翁舞が奉納されている。

昭和天皇御製が、皇紀二千六百年（昭和十六年）奉祝の際に祭祀舞として制定され、広く全国の神社に奉納されている。

〝天地の神にぞ祈る
朝なぎの海のごとくに
波立たぬ世を〟

この御製は昭和八年の歌会始めに詠まれた和歌で、不穏な当時の世相を、昭和天皇が御憂慮され、安かれと祈られたお歌と拝される。

「南坊流献茶祭」

三日午後二時から拝殿で南坊流瀧口宗芳社中献茶祭が奉仕され、袱紗さばきも鮮やかに、動と静が見事に調和した御手前を披露、神職の手により神前に奉納された。

南坊流とは、南坊宗啓（そうけい）（千利休高弟）により開流されたと伝えられ、その後江戸南坊（京都）と筑前南坊とに別れ、黒田家が筑前を領した頃から福岡地方に広まり現在に至っている。

当大社との関わりもその頃からと思われ、一時期途絶えていたが、昭和中期頃復興した。

現在当社巫女も教養科目としてこの「南坊流茶道」を習得している。

氏子会会長
倉元清彦氏の油絵展開催
力作五十七点に魅せられる

秋季大祭に合せ、一日より十四日まで、祈願殿待合所二階ロビーで、当社氏子会会長である、倉元清彦氏の「油絵展」が開催された。

作品は大小五十七点で、会場がせまく感じられるほど。

会場入口に展示されている百号の「古代祭場」は当社の聖地「高宮斎場」の風景で、樹間より射す光と、神木の注連縄の白が全体に神秘性を感じさせる神々しさにあふれている。

「唐津街道」「根子岳遠望」「本木風景」「薬子浜ノ薬子岩」等大作が多く、中でも倉元画伯の代表作が「奥入瀬秋景」である。この作品は、平成三年日本美術協会主催の第二十九回全展で金賞を受けた百号の堂々たる大作で、作品の前に立つと水音と奥山の風音が聞えて来る様である。

さらに「菊池渓谷」「早春の休日」「九重登山口」「平尾台羊群原」等の大作にまじり花を絵いた小作品も多い。四季を通した草花には時折々にキャンバスに向かわれた、倉元画伯の心中を語るかの様に、見る者を引きつける魅力がある。

全ての作品を通して、作者が七十才以上と云う高齢である事を感じる人はいないと思わせるほどエネルギッシュな力作ばかりである。

倉元氏は、平成三年九月に第二十九回全展「海外留学生大賞受賞」を機会に、宗像市中央公民館で個展を開かれた。当時（七十才）は、当社氏子会副会長として、御奉仕いただいていたが、平成十年五月からは会長として、さらなる御奉仕をいただいている。その公私共に多忙な中で、平成四年には「全国本美術新聞社賞」さらに五年に九州全展の「福岡県知事賞」平成六年には「北九州教育会賞」受賞など、才能もさることながらその努力は、若者をしのぐエネルギーがある。

趣味から始められた「六十の手習い」と倉元氏は笑談されるが、そのプロの世界へと躍進された日々の努力から生れる作品は年令を感じさせない。

倉元画伯は、福間町本木に在住の敬信厚き篤農家であるが、幼少の頃より絵を描くことが好きで、六十五才過ぎから、多少の余裕時間も出来たので、昔から好きだった絵筆を握らうと油絵に挑戦されたそうだ。

当時当大社責任役員であった、同地区出身の古賀芳人氏に師事されたのが始まりで、以後、暇をみつけてスケッチブック片手の写生生活を続けられている。

連の会（日本画展）

同会場で引続き連（さざなみ）の会」日本画展を開催致しております。「連の会」は福間の浜波を愛する絵画クラブの人々です。

期間　十月十五日
　　十月三十日まで

出品作者

古賀　芳人
井口　節子
佐藤　清子
徳永　映子
牟田万里子
古賀　波子
川野　正子
高宮喜美子
中野恭仁子
毛利冨美子
米田　真弓

以上十二名

神郡宗像地方略誌（六）

遺跡・古墳から記録に入る時、資料とすべき書は、奈良時代の『風土記』であるが、残念ながら「筑前風土記」は幻の書である。しからば「筑前國続風土記」を中心に「筑陽記」「続風土記附録」「続風土記拾遺」等より資料抜粋で調査し、現況を含わせ見ながら地方略誌を解して見ようと思う。全国各地の「風土記」については、いろいろ有るが完全なる記録として残っているのは「出雲風土記」くらいで残片的に一部を有する物がほとんどである。

「筑前國風土記」も一部が残っている、しかし「続風土記」は江戸期の有名な国学者「貝原益軒」の撰による立派な筑前福岡藩書として保存されている資料であり、また「同拾遺」は筑前国学の祖とされる青柳種信である。「同附録」は藩士加藤虞山、鷹取周成の編纂による書であれば二級品の資料である。これらの資料をもとに各地の伝説社寺由来等を含めながら進める事にする。地方略誌に入る前に少し横道に入るけれど、これらの書の撰者である前記国学者先哲の紹介と書の内容構成を記しておこう。

『筑前国続風土記』と貝原益軒書の表題は、益軒が自序の中で述べている「奈良時代の『風土記』になぞらえ、其名をしたひて名づけた」ものである。全書三十巻から成る大書籍でその構成は、提要二巻・藩内十五郡八〇〇余村の郡記二十一巻・古城古戦場記五巻・土産考二巻・から成る内容である。さらにその成立年代は、元禄元年（一六八八）に藩許を得て領内巡歴に着手し、元禄十六年（一七〇三）藩主に上進し、その後も改訂を加え宝永六年（一八〇九）に完成、翌年藩主に献上した時に益軒八十一歳と云う生涯をかけた大編纂書である。益軒の代表三書『大和本草』『養生訓』『筑前国続風土記』の中でも特筆される名書である。

江戸時代、幕府の命令で全国各藩でも地誌が編纂されこの益軒の『続風土記』がその模範とされ、福岡藩においても公撰地誌ではこの書を「本編」として位置づけたほどの書である。

＝貝原益軒＝

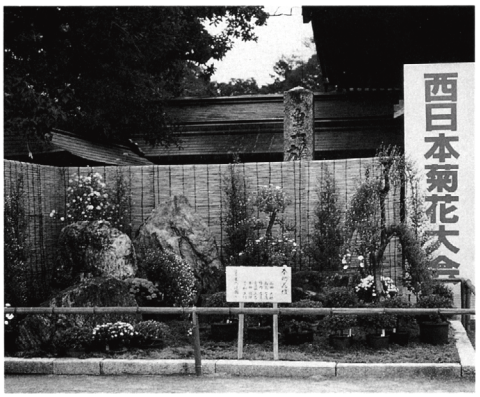
時は江戸、徳川三代将軍家光の世、寛永七年（一六二〇）福岡藩十五万石、寛斎の五男として生を受けた。幼名を助三郎、のち久兵衛を名のる、諱（実名）は篤信、号は損軒、晩年になって益軒と号す。益軒は幼い時から神童の評高く、七歳で仮名をおぼえ、九歳にして軍記物を愛読し、十歳で「三体詩」を解したと云う。さらに十四歳で「四書」を習め、十七歳にして朱子の「小学」をも学習したほどの天稟の才に恵まれた人であった。

十一月神賑行事　御案内

第三十回　西日本菊花大会

当天社境内全域に、九州各県の菊花愛好家が丹精込めて作り上げた名花三千鉢以上が特設展示場に展示されます。錦秋の神苑に大輪懸崖・盆栽・特作など見事な菊花が咲き揃う西日本最高、最大の菊花大会です。

この西日本菊花大会は、昭和四十六年、宗像大社昭和大造営完成の折の遷宮遷座祭並同奉祝大会の神振行事として第一回大会が開催されて以来、毎年行われ、今年で三十回目を迎える伝統ある催しです。本年は第三十回という創会以来の節目の年でもあり会員一同の出品菊に対する意気込みも例年に増して強く感じられます。



又、本年は地元玄海小学校生徒による作品展も展示され、生徒達が純粋に育て作り上げた菊約八十鉢が奉納され、さらに三十周年特別奉納花壇など例年にない特別作品が奉納されます。

まさに、西日本一の菊が一堂に集まり、宗像大社神域に奉納されるこの時期は七五三の家族連れなどでも境内は賑い、見事な菊の前で記念写真を撮る家族も目立ちます。

このような西日本菊花大会を本年も左記の通り開催いたしますので、ぜひお詣り下さいます様、御案内申し上げます。

期日　十一月一日～二十三日
場所　宗像大社境内
表彰式　十一月十九日
拝観料　無料

大分県立博物館「古代国家・九州島」特別展

海の正倉院「沖ノ島」祭祀遺品三十五点（国宝・重文）を展示

大分県立博物館（館長＝岩井宏實氏＝宇佐市高森）は本年度特別企画として「古代国家・九州島」特別展を十月十三日（金）から十一月十二日（金）までの一ヵ月間、開催している。

この特別展に、当大社沖ノ島から出土した国宝「金指環」（我国唯一の出土品）を始め、十二品目三十五点の国宝・重要文化財の祭祀遺品を特別出陳している。

この特別展はアジア大陸と一衣帯水の間にある九州北部に、稲作農耕と青銅、鉄器などが最初に伝えられた、この新しい文化を基に原始国家が形成された。古墳、遺跡などの出土品から、畿内勢力による大和朝廷成立まで九州が果した歴史的役割と考証を行うという主旨で開催された展示は

一、九州弥生文化の成立
一、九州古代国家の出現
一、トッピングコーナーの三部構成で、内館の特別展示室に系統別に展示され、一般拝観者はもとより小中学生にも理解できる案内、解説がなされている。

一、大分県立博物館
（別名＝風土記の丘）
一、所在地
宇佐市高森字京塚
一、最寄駅　JR柳ケ浦駅下車（路線バス一日二往復）タクシーにて十五分位
一、特別展拝観料
大人一人　一〇〇〇円
高大生　三〇〇円
中小生　一五〇円
団体二〇名以上三五〇円
一、TEL　〇九七八―三七―二二〇〇（代）

秋季奉納盆栽展

秋の盆栽展は、松柏類の木物を中心とした盆栽が約五十席展示されます。御本殿横の西側境内に奉納展示し、できるだけ自然に近い姿を目指し露天展示しています。

宗像大社奉納盆栽会は、昭和四十七年に神郡宗像の愛好家が「宗像大社の御神徳の発揚に勤め、日本の伝統と格調高き美を遺憾無く表現できる盆栽の普及、創作技術の研鑽に励み、盆栽発展の一助とすることを目的」として結成され、翌四十八年に第一回目の展示会を開催して以来、現在は毎年春、秋と二回盆栽展を行っています。

期間　十一月中旬
会場　本殿西側境内

第二十五回　献詠短歌大会

短歌愛好者に好評を博している宗像大社献詠短歌大会（主催＝宗像大社歌会、後援＝毎日新聞社主催）が十一月十一日境内が菊花で埋る時期に開催されます。

昭和四十六年の宗像大社遷宮奉祝祭を記念して発足した大会も、本年で二十九回を迎え、九月中旬に締め切った短歌の募集も百十五首集まり大会当日を待つばかりです。

五・七・五・七・七の五句、三十一音から成る短歌。美しい日本語の表現として、古くから日本人に親しまれています。参加者に年配の方が多い為か人生経験のにじみ出た、心を打つ作品が多く、本年もどんな力作、秀作が飛び出すのか楽しみです。

宗像大社歌会では、この社報「宗像」に掲載する、短歌、俳句を毎月二十五日締め切りで募集しています。御希望の方は、宗像大社歌会まで送付願います。また、短歌の勉強会である互選会も、毎月第三土曜日に当大社斎館に於いて開催しておりますので、参加願います。

県知事賞・宗像大社宮司賞・県教育委員会賞・毎日新聞社賞各一名ずつ・選者賞四名・互選八名・佳作十名の計二十六名の賞が準備されていて、選者は、中西輝磨氏、江口富士子氏、山崎源太郎氏、大野展男氏の四氏となっています。

第二十回　神前少林寺拳法奉納

この演武は、宗像地区の少林寺拳法連合会が毎年奉納頂く演武会で、併せて福岡教育大学少林寺拳法部にもお手伝い頂いています。

当日は、指導者格の拳士の方々を始めとして大学生・少年拳士等百余名が、本殿横境内地に一堂に介して日頃鍛えた錬習の成果を神前にて披露致します。

特に小学生を中心としたチビッ子拳士の演武は注目を集め、技量が未熟で時折うまく技がきめられない事もありますが、多くの観衆や親御さん見守る中、皆必死に演武に取組みます。その様子が健気で初々しさが心地良く目に映ります。

福教大少林寺拳法部の方々も学業の最中での武道修業の短い練習時間に修得した技を最大限発揮すべく取り組まれます。

見事なのは指導者の方々の演武で他の拳士とは違う伝統の黒装束の道着を着けられ次々と早技で高度な演武をこなす様が素晴らしく少林寺拳法の真髄が分かります。

少林寺拳法は、宗道臣師が中国少林寺に伝わる拳法を戦後日本に持ち帰り広めたもので五十余年の間に飛躍的に発展しました。今日では合気道と並ぶ武道として日本に定着しています。その妙技を今度神前にて披露致します。

期日　十一月十九日
午後一時より
会場　本殿横境内

「秋の交通安全週間」

「秋の交通安全週間」の九月二十八日、秋晴れの下、宗像市と福間町境の白水峠県道で「秋の交通安全県民運動」交通安全キャンペーンを宗像警察署と宗像交通安全協会・宗像大社と合同で実施した。

大社より神職一人、巫女三人が、宗像警察署馬場義之署長以下署員、宗像交通安全協会役員らと共に街頭活動を行った。

午後二時より約一時間、宗像市郡でも交通量が多く、「取締重点路線」となっている、県道66号線（旧国道3号線）を通過する車に、啓発のチラシや清涼飲料、当社の交通安全御守、ステッカー・ミニ絵馬をドライバーに手渡し、「安全運転をお願いします」「シートベルトの着用をお忘れなく」と一人一人に声をかけた。特に今年は、「チャイルドシート」の着用義務化に一層の注意・協力を呼びかけた。

交通マナー等が大きな社会問題になっている今日、このキャンペーンが少しでも交通災害の解消に役立てればと、宗像署員や関係諸団体は運動をしている。

"正しくシートベルトを着用しよう"　"新世紀になりこの子にチャイルドシート"

中野良広作品展

期間　十一月一日～三十日
会場　祈願殿ロビー階上

現代に至るまでの作家活動は巾広く、花器、置物のみならず照明の分野までおよび衆目を集めている。

特に近年硝子彫刻において新境地を切り開き、今後が更に期待される工芸作家である。

現在玄海町池田に工房を開き活動。

昭和14年7月8日佐賀県出身
硝子工芸歴39年
佐賀県立有田工業高校デザイン科卒
日本硝子工芸協会員
九州クラフトデザイナー協会会員
日本煎茶工芸協会会員

第四七十二回　宗像大社歌会詠草

大野展男選

毎月25日〆切

福間　中村　勇
里芋の葉の露玉は朝より草取るわれの野良着を濡らす

（評）急激な冷えに下りた露は燦々とかがやいていただろう。それは老いてなお農作業に励む作者に対する自然の讃歌かも知れぬ。

名古屋　小田　喜一
自らにうち克つならひ吾にあり兵たりしこと今も悔なし

（評）兵の日に得た生きざまを今に守る。それは戦争を肯定することとは別のことであり、凛とした態度は見事である。

吉留　高山　信子
曽孫をめったに抱けぬ身の不幸言うまじ蟷螂わが書にとまる

（評）曽孫に対するいとしさを押え、私には読みさしの本に来てとまる蟷螂が居るよと、言っている。老いの諦観といつくしみの歌。

池田　小田　イセ
姉の香ほほのかに残る喪のすみて形見の軽羅干しゐる吾に

（評）軽羅は、薄く織った織物で紗や絽の類で、それは薄くはかない生命の喩ともなっている。二句で一旦切って読むことにより、姉に対する気持がよりあらわれる。原作の片身は形見。

田野　森　甲子
エンジンの音響かせてミニヘリは稲田をひくくとび薬撒く

（評）現代的農業風景に対する驚きが、気負わず素直に詠まれていて、好感を呼ぶ。

田久　井上　光
菩提寺に響きて太し海峡の潮に逆ふ船の汽笛は

日の里　石松　弘次
演奏に合わせて唄う敬老会「麦と兵隊」に湧くアンコール

光陽台　香月　照子
青空に羊のような白き雲二つうかべて夏は去りゆく

鐘崎　安永　久子
かつてなき猛暑続く藤棚にくるい咲きしか小さきむらさき

朝野　藤井　浩子
義理買ひの携帯電話は老い二人使ふことなく繋がたるまま

原町　八波　五月
山二つ並びて見ゆる鞍手山父母と住みたる我のふるさと

名古屋　小田　留子
我が前に座りし少女ためらはず化粧始めぬ電車の席で

八幡東　古賀美千代
岩を打つ波音ひろがり崖の上鳶の声の澄みて聞こゆる

光岡　竹浦　葛明
小川辺の芽に縋りし空蟬は秋づく風に共に揺れおり

大島　越智　治子
名月さん芋くんないと子供らが戸毎まわりし昔なつかし

ひかりケ丘　中村　哲真
只一羽孵えりたる雉子あわれゆえ娘のごとくいつくしみ飼う

日の里　佐藤　純一
紅に染まりて楓の散るさまに身龍りし叔父の思い出溢るる

在自　佐々木和彦
青田なる上を群れ飛ぶとんぼらは吹く川風にたくみに乗れり

武丸　中村さつき
長月に入りても続く熱帯夜扇風機のタイム又二時間

光岡　森田富佐子
白き蛾が木影求めて飛び来るにつばめは餌にす芝生の上にて

城南ケ丘　中間日出子
我がまちも自改札機の導入声かけくるる駅員のなし

田野　森　つるの
処暑過ぎて草叢に虫鳴き始む涼しき秋の夜は来りて

光岡　河村　久光
誂えし遠視の眼鏡かけたればよくよく見える店の看板

光岡　古森テル子
見の限り伸びし稲田は緑なし穂波を立てて葉ずれも聞こゆ

日の里　大和美由紀
なつかしきみんみん蟬の声を聞き友の車で峠越え行く

自由ケ丘　細川　絹子
冷麦に浮かせし氷のたちまちに溶けゆく音す昼餉の膳に

曲　天野　玲子
草も木も灰の覆える三宅島色無き世界をテレビは写す

宗像大社歌会
俳句作品集（四四七）

福　間　森　清

早稲刈るや鳥追ひ竹は老集む

自由ケ丘　細川　絹子

散歩するわが道いよいよ紅葉せり

小　笹　山下しづえ

火の鳥共に泳ぎたしオリンピック

日の里　花田いつ枝

鮨桶の箍の緩みし秋暑かな

東　郷　吉武　湧泉

土用波沈む原潜救ひ得ず

東　郷　中野　きみ

早朝にぽんと拍手で開く蓮

東　郷　吉田　衿子

施餓鬼会の寺にて一塊の空となる

東　郷　吉田　杏子

浦町の料亭さびれ浜おもと

東　郷　三浦美千代

夜の闇に送り火ひとつ沈みけり

東　郷　田中　雨葉

島の道すぐ突き当る土用波

東　郷　木原　房子

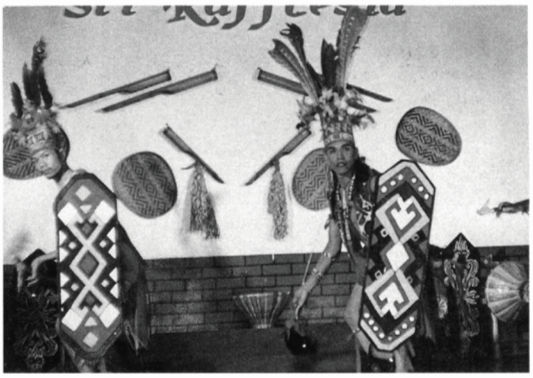
千年杉亭々として雲は秋

東　郷　田中　憲豪

遠花火富士の高嶺の一行詩

（続）浜の寄物 151

いしいただし



ボルネオの民族舞踊

少し話題をかえて、ボルネオ土産で、吹矢を買ってきたので、吹矢について述べておきたい。

旅行の最終日であった。夕食はホテルから離れた中国系の飯店でおこなわれた。旅行最後の夜であり、現地人の踊りを見ながらの食事であった。美しく飾りつけをした民族衣装をまとい、男女が盾や剣、槍を持って舞うのだが、昔の絵ハガキが動き出したような感じがした。終わりの方で一五〇センチほどの長い棒をもった踊りの男は、舞いながら棒を両手で根元の部分を持って口にあて、ぷっと吹くと、舞台のはしに吊られていたゴム風船がパチンと音をたてて割れた。吹矢であった。そうか、ボルネオには吹矢があったことを思い出した。

翌朝、出発までの時間、ホテルの売店を見てまわると、ボルネオの民芸品を売っているところがあり、そこに吹矢もあった。堅い木を刳ぬいたもので、小は二、三〇センチから大は一五〇センチほどある。どれも先端はヤリ状をした堅い木が藤で結びつけられている。吹矢で倒し、ヤリでとどめを刺すのであろうか、三〇センチと一メートルほどのをボルネオ記念に買った。矢筒は竹製で、簡単な蓋がつき、その中に、二〇センチほどの竹製の矢が入っていた。

コタキナバルからクアラルンプール空港に戻った時、空港内で、棒状のものを紙で包んだアメリカ人観光客とすれちがった。楠本正さんが「あんたに似たアメリカ人がおるバイ」と言って笑った。

吹矢は矢を飛ばす吹筒を英語でブロー・パイプとかブロー・ガンと呼ぶ。太さ三～三・五センチ、長さ二メートル位で、竹筒か木製の刳り抜き筒である。

矢はダーツと呼ばれ、マレーではダマルと呼ぶ。長さは一五～二〇センチぐらい。竹かココヤシの葉肋で作られ、先端を尖らし、先端から二、三センチ位のところに刻目をつけ、吹矢が射込まれた時、先端が折れるようになっている。他端は軟木製か木髄のコルクがつけられている。吹矢の飛行距離は水平の場合三〇～四〇メートル、空に向けて発射すると九〇メートル位というが命中率は近い方が高い。（毒矢の文化・石川元助）

口蔵幸雄の「吹矢と精霊」（東京大学出版会）にはマレーシア半島の「オラン・アスリ」と呼ばれている先住民のなかの、スマッ・プリ族のことが書かれている。スマッ・プリは、焼畑農耕民だが、一部は熱帯林に入って採集狩猟を行っている。口蔵氏は狩猟民と一緒に熱帯林を行動を共にし、五八回の吹矢猟を体験している。

この猟では二メートルの竹製の矢筒が使われている。

「吹矢をこめる内側の筒と補強の役目をする外側の筒からなる二重構造をしている。内側の筒も2本の竹をつなぎあわせてある。筒の一端に、樹脂を円錐形に固めたマウスピースがとりつけてある。吹矢を射るとき、これを噛みしめて、ありったけの息を一気にはきだす。吹矢はヤシ科植物の幹を櫛状に削った矢軸の一端を尖らせ、反対の端にやわらかい木髄を円錐形に研磨したものをとりつける。これはおもりの役割をし、吹矢の飛行を安定させる。吹矢の先端に毒を塗る。この毒で獲物を殺すのである。毒はイポー（ウパスノキ）とよばれるクワ科である」

その威力はどうか「時刻は四時すぎ、村までわずかの距離のところでダスキールトン（サル）の群れを発見した。ピサン（狩猟者の名前）が群れに忍びより、何発か吹矢を射た。しばらくすると群れは去っていったようで静かになった。しかしピサンは座りこんで樹上をみている。そのうち「ガガガガ」という声につづいて「ウツウツウツ」といううめき声がきこえてきた。そのあと、このうめき声だけが断続的にきこえていたが、しばらくするとなんの声もしなくなった。それから一〇分ほどたって、突然「ドサッ」という音とともに一頭のダスキールトンが樹上から落下した。イポーの毒には神経と筋を遮断する作用があり、筋が弛緩して動けなくなる。」

話題の車紹介
トヨタ「bB」

今回、ご紹介する話題のクルマはトヨタ「bB」です。排気量は一五〇〇ccと一三〇〇ccの2種類があります。どちらも新開発のエンジンで、燃費の向上、CO2排出量の低減といった家計にも、地球にもやさしいクルマになっています。さらに、リサイクル性を高める素材を多く使用し、あらゆる角度から環境保全対策を進めているクルマです。bBのグレードはオーソドックスなノーマルタイプとエアロパーツやアルミホイール、プライバシーガラスなどがセットになっているXバージョンがあります。操作視認性については、全車にオートマチックコラムシフトを搭載、直線基調のパネルには視線移動の少ないセンターメーターを採用。その他、スイッチ類も使いやすく配置されています。ボディカラーも夜にあるダーク系4色と、昼にあるブライト系2色の計6色が用意されています。しかし、bBの最大の特徴はどこにいても圧倒的な存在感を放つ個性的で新しいデザインと、角形のパッケージングが生み出す驚異的な広さの室内空間にあります。リヤシートを倒し、ダブルフォールディングの状態にすると大人サイズのマウンテンバイクが一台。スノーボードなら2枚が見事にキッチリ入ります。bBの収納力の高さはそのまま遊びへの対応力の高さになっています。カスタマイズ用品も多くありますので、自分だけのbBを作ると楽しみがより一層増すのではないでしょうか？安全性では、運転席、助手席のエアバック。進化したGOA（高性能プラットフォーム）EBD付ABSやブレーキアシストなどトヨタの最新技術が支える高い基本性能をもっています。全体的にみて若者向けのクルマというイメージの強いbBですが、年齢層が比較的上の方々にも大人気のクルマです。

お問合わせ先

ネッツトヨタ北九州（株）　宗像店

☎〇九四〇―三―四三三

「神郡宗像＝宗像大社末社めぐり」

（十）依嶽（よだけ）神社

海岸沿いに走る国道495号線を郡境垂見峠に向って走ると左手に「玄海ロイヤルホテル」を見ながら瀬戸信号に出る。この信号を直進して峠を約五〇〇メートル程登った処の町道辺に「依嶽神社」の案内板が建つ、小さな案内板なので注意して見ないと見落としてしまう。この町道を約二〇〇メートル入ると、民家裏にある小さな森に入る、この森が「鎮守の森」である。国道から入っているので周辺はしずかで、正面の古い鳥居をくぐると立派な参道が東にのび小川には神橋もかゝり、神域が守られている。石段を十数段登ると拝殿前広場に出る。境内は周囲を広場には樹除と光大小の樹木が繁り、が白黒のコントラストも美しい雰囲気を漂よわせている。

正面本拝殿右側の一段高い処に「森俊社・須賀社・波打社」三社を祀る一棟の社殿が建ち、左側には「大歳社」他三社の祠が祀られている。

今回の参拝調査は、この右側三末社の一つ「波打社」である。この一棟は近年改築された様で、瓦も柱も新しく、扁額の墨濃も香ぐわしい。

祭神は瀬織津姫命・住吉神・志賀神とあり、由緒記には、「社記ニ曰ク、往古ハ駆洲ト云フ所ニ鎮座アリシカ、何レノ時ニカ、今ノ小丘ニ移セリ。此地ハ江口浦ト津日浦トノアハヒヨリ東北ノ方、海潮サシ入テ、広キ江海ナリシカバ、洲口寒カント、此三社神ヲ鎮セシ、故ニ、波打明神ト称スト云ヘリ。宗像七十五社ノ一ナリ。創立再建不詳。大正十三年十月十八日許可ヲ受ケ合祀ス。（旧鎮座地の駆洲と云う地は、今ではわからない）とある。

往古には、今の五月松原も洲口（米出し川）あたりで切れ、海潮が満潮に広がる洲であり、この鎮守の森も海岸の小高き所だったのであらう、そう云へば「上八貝塚」跡地も目前にある。

さらに「宗像神社史」の「波打社」を見ると、鎌倉期年中下行事の中に、五月五日の五月会及び八月十五日放生会船御供の篠に、「波打の御馬　脂」とあって両祭の神幸に、当社は伊摩社（先月号調査社）と並んで御馬を出し、これに供奉している。

御縁起に百八神の一つとして、「波折大明神」、同高宮下符社のうちに「浪折明神社」とある。と記されている。

これらの記録を読みながら、この社殿前にたゝずむと、古往の風景が浮んで来る、車の音が、かすかに聞へる国道も、あのロイヤルホテルの白い建物も、その下に広がる玄海東小学校の校舎も校庭も無く、広い遠浅の洲口が広がり、左側の海岸近き処に「上八貝塚」があり、当時は対岸であった江口浦の松原がたなびくこの小高き森、背には孔大寺山、湯川山がそびえ、海の幸、山の幸に恵まれた土地だったのであらう。

境内の樹林の陰に古代の人々の楽しい声が聞こえて来る様な気持ちになった。

「筑前続風土記拾遺」の「浪折神社」を見ると、

「上の岳といふ所に在。向田野の産神也。所祭瀬織津姫命・志賀明神・住吉明神也。社記日、古へは此地江口浦のあはひより、東北の方海潮さし入て、広き江海也しかは、洲口を塞んとて、此三柱神を鎮め奉りて妨く。築留得たりし故、此所に社を建て、浪打明神と称し奉るといへり。宗像七十五社の一つ也」と記されている。